



その5

# 岡田本房

—おかだほんぼう—

(平成21年8月1日号—第262号)



岡田家は、代々坂村一宮[いちのみや] (片埜神社)の神主を務めています。本房は、寛延3年(1750)岡田正時の3男として生まれ、早くから領主水野忠徹[ただたか]に仕えます。19歳のとき江戸詰めを命じられ、35歳で家老になりました。帰郷後、河内・大和・近江に散在する水野領の代官として坂村の水野家陣屋で執務しますが、長兄・次兄の死去により一宮の神主を継ぎ、両務を兼職しました。

代官としての彼は領民にやさしく、清廉・潔白で自己に厳しく、常に領民に慕われ、広く「賢宰」[けんさい]と称されたと言われています。

一方、彼は幼少より学問を好み、江戸では海保青陵[かいほせいりょう] (経世家)に師事し、帰郷後は江村北海[えむらほっかい] (漢学者)と交わるなど、儒学・詩歌などに通じるとともに、私塾を開き門弟の教化にも携わっていたようです。

船橋村二ノ宮神社の井上金橋[きんきょう]とは生涯を通して深い親交を結んでおり、金橋の没後、金橋評伝とも言える『酔花軒主人行状』を著しています。

また、本房の著作『岡氏家訓』『岡氏家訓後編』の2書は、修身齐家[しゅうしんせいか]の書として領主から賞賛され、他にも『鶴鳴詩鈔』[かくめいししょう]『鶴鳴文抄』『雪乃明仄』[ゆきのあけぼの]などが現存しており、彼の多才ぶりがうかがえます。



片埜神社南門(牧野阪2丁目)